



全国自治体初!

胃カメラ巡回検診車の導入

平成29年度から胃カメラ巡回バスによる胃がん検診を開始することに伴い、市保健福祉ふれあいセンターで「胃カメラ巡回検診車の導入」について内覧会を行い、県議会議員、市議会議員、関係機関などから約60人が参加しました。

市の胃がん検診の受診率は、他のがん検診に比べて低く、胃がんの死亡率も岐阜県平均より高くなっています。そのため市は、従来の胃レントゲン検査に加え、より気軽に効果的な胃カメラ検査を導入することで、受診率向上を図ります。また胃がんの早期発見、早期治療を行うことで、胃がん死亡率の低下が期待されます。

胃カメラの巡回検診車を導入する自治体は全国で初めてで、5月から11月にかけて公民館や市保健福祉ふれあいセンターで行う集団検診で利用することができます。検診料金は2,000円で、所要時間は20分程度。また、6月からは市指定医療機関においても胃カメラ検査を開始し、市民の皆さんがより検診を受けやすい体制となります。

この日は、林市長が実際にバスの中で胃カメラによる検診を体験しま



この検診車は、岐北厚生病院に配備されたもので検診時に市が使用します。

した。カメラは鼻から挿入し、モニターに映る自分の胃の中を見ることができ、市長は、「想像以上にスムーズに検査が行われ、医師の説明のもと安心して受けられるので、ぜひ市民の皆さんにも気軽に胃がん検診を受けてほしい」と呼びかけました。

古田紹欽記念館で

お干菓子づくり講座

2月5日、古田紹欽記念館でお干菓子づくり講座を行いました。

この講座は和菓子を食べるだけでなく、作ることで、和菓子や日本文化の魅力を体感してもらうことを目的に行い、小学生から60代まで幅広い年齢層の12人が参加しました。和菓子づくりには欠かせない道具の一つ、菓子木型を使っての落雁(らくがん)づくりや、バレンタインにちなんだハート型のお干菓子など数種類の和菓子を作り、伝統ある和菓子の季節感や技法について学びました。

また、参加した子どもたちは「難しかったけど楽しかった。みんなで食べるのが楽しみ」と話していました。



自分たちのまちは自分たちで守る

防災リーダー養成講座



東日本大震災や熊本地震など、近年さまざまな災害が発生し、各地に甚大な被害をもたらしています。こうしたことから市は、日ごろから「自分たちのまちは自分たちで守る」といった防災意識を持ち、災害発生時に地域で活躍できる人を養成するため、防災リーダー養成講座を行いました。

講座は44人が受講し、2月から3月にかけて全4日間の日程で座学や救命講習、ロープワークなどの実技を学びました。

最終日には、日本防災士機構による防災士資格取得試験が行われ、合格者は防災士に認定されます。

小学生ラグーマン 全国大会へ！



2月20日、藤田浩史さん(美山小◎)が「第9回ラグビーヒーローズカップ決勝大会」の出場報告に訪れました。藤田さんは、小学校1年生のときから関ラグビースクールに所属し、週末は同スクールで弟と共に練習に励んでいます。同スクールは東海北陸大会と関西大会を勝ち上がり、花園ラグビー場での決勝大会に出場しました。藤田さんは「市や県を代表して出場するの、良い結果を残したい」と、中学に行ってもラグビーを続けたい」と、市長と教育長を前に抱負を語りました。



地域と一体の教育で梅原小が 県ふるさと教育表彰で優秀賞

岐阜県ふるさと教育表彰で優秀賞を受賞した梅原小学校の原永子校長が、2月10日、教育長を表彰訪問しました。

この表彰は、児童生徒が地域の人たちと関わりながら身近にある地域について学ぶ「ふるさと教育」を実施している学校を表彰するもので、小学校は89校が応募し、優秀賞には21校が選ばれました。

梅原小学校は、歴史文化や農業を地元住民から学んだり、学校と地域が一体となって開催する「ゆう・友・ふれあいフェスタ」で発表したりしたことが認められての受賞となりました。また2月19日に梅原公民館で行われた学習発表会には、同校の全学年が参加。一年間を通して学んだ梅原のよさを、地域の人たちに発表しました。



無形民俗文化財調査研究 中間報告会

2月18日(美山中央公民館と19日(花咲きホール)に市無形民俗文化財調査研究の中間報告会を行い、約190人(2日間計)が参加しました。

報告会では、民俗文化財調査専門委員会から「美山地域中・北部の精霊送り」と太鼓踊り」「山県市の祭りや行事、芸能などの報告がありました。

参加者は先人が築き、守り伝えてきた文化財の意義や魅力をあらためて感じているようでした。

若いアイデアで魅力発信を 市職員と大学生が意見交流



2月16日、岐阜女子大学の学生と市職員が、市の魅力や情報発信について話し合う交流会を行いました。

この交流会は、若者の視点で魅力を洗い出すことを目的に、市と包括連携協定を結ぶ同大学に声かけを行ったもので、大学側は1〜3年生が、市側は若手を中心とする魅力発信プロジェクトチームからあわせて約20人が参加。「買物物のために土日のバスを充実させてほしい」といった生活に関する意見から、「SNSを積極的に使って魅力を発信していくべき」といった情報発信の手法まで、多くの意見が交わされました。